

三里塚

ガニ次強制収用実力阻止

—斗いの記録—

はあら×人の口宣言

や廣のものと並んでおぬし、おはは まくめいがなはだ
あつ えをのこる所間がほんと、おぬしのこはるてこころの
手筋に、おのれを 故はぬれ
おぬれがたはと、おのれをそにラントリの下
きてそぞことおもへて、おもへておもへておもへておもへて
この前、お前のおふたりはおおさんを そりうとおひき
おはせだむけた。おおさんこそおおはるか面おはるかはおひき
おひき。二三ヶ月はおひき。お門はさんちやくじきつたり
あら おひきをうめく。おひき。おひき。おひき。おひき。
おおさん中おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。
おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。
おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。
おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。おひき。

日本革命運動の輝かしい一面、武装せる三里塚農場学共同の死斗!

メルマガ「資本家・政府・公団の毒大へ共闘隊が来た」、「新東京田舎空港」建設幹部へ、
《三里塚農場労働者口伝》の「16日の『活戦』」

○16の日、三里塚決戦のメモを記した。

政治、公団は、①政幹、②100名もの制・私服警官が先頭にして、廻り、マルチカー、大型など走り様、クレーン車等、大型土木機器、③10台以上繰りだし、鎌ヶ谷、大庭、木ノ根団結川屋、社(16日)、三里塚に襲撃攻撃してきた。既に、④一田、牧野千葉県知事は、三里塚、⑤三の農山へ移して、不当にも、オーナー改選決行の戒告が生じ。○16の日、鎌ヶ谷、大庭、住居地であった、なご場合、⑥以降、二種別改組が毎日のように繰り替えていた。勿論、反対同盟の農民連は、渾底の支援行動者、学生や、会員の武場、共闘の結集した先進的行動者、学生と共に、不屈の「母の命を守る」精神で、会員の精神を鼓舞し、地下壕を掘り、徹底抗戦体制を確立と準備し、そして、元の田、馬や牛たちの頭、鎌ヶ谷、大庭、木ノ根団結川屋、
三里塚農場への草十人の暴行と、公田の狂氣の羅罪、古事。

「活戦」は、未明から開始された。

《午前6時から、戦闘は開始された》

攻撃、飯端のもの全焼。

①時、大噴水の直路を、バニード封鎖

の毎日、大噴水三里塚付近で、ピートゴーランヌがハド

（8時4分）成田結二屋にて執行宣言。政府は即ち、西

田町地への公団、林動隊の襲撃が始まる。執行オルガ林動隊七十人に対する。林動隊は、爆弾

、木ノ根田結二屋の皆の一部を強引に排除。林

動隊の暴行にも屈せず、地下壕、やぐら抗戦か、すりへ

めでひるまず徹底抗戦。

（8時5分）駒井崎田結二屋の攻防よりお察し。火炎び

ガコンと命中し、重転手砲から飛行出す。

（8時6分）東峰地区で、奥東管区林動隊神奈川県警一個大隊、三五十五機、本轟戦でもって完全に殲滅する。市街戦用に訓練された番犬どもの閑長が見事に攻撃し、彼ノ威、「死」の恐怖の心に叩きこぶだ。一周去、敵がぎりなく一増加、活躍に終り、不思議し、不思議捕して、

た、あの極端非道な林動隊につれて民の難題は下され

たのだ。直近にきて、ヨースガ伝わるや、

（8時7分）昔ながら、昔の中から「魔義なし」の声が上

げる

（8時4分）大清水三差路付近で、爆弾で空を突撃で、警
戒され林動隊七十人に打撃が与えられる。林動隊は、爆弾
と火薬で撃退す。同じ頃、京成成田駅で梗田の林動隊
に撃たれ、戦斗意欲喪失。

（8時5分）駒井野田結二屋にて林動隊突入するが、火炎び

の壁を突破す。

（8時6分）成田結二屋にて攻撃。

（8時7分）三里塚オーハ園周辺にて解放区へ化す。

（8時8分）駒井野田結二屋にて、馬鹿片林動隊は、猛烈な放水で倒壊して、皆にわかれていせいか撃滅。又、大型飛行機四台が皆三方面から向もように襲いかかる。

駒井野田結二屋。

（8時9分）20メートルの農民放送塔を倒す。

（8時10分）且て、食えた番犬どもの殺人行為を許す。

日本庄田生マの、アシヤ侵略、反革命「外交」の表

文書としての、また、軍事的、経済的侵略の拡張としての

「新東京国際空港」建設と、「農民殺し」とわざなげんとする政府、公団

「采石石一畠林を飛ばせぬよ!」「四千メートル滑走路の建設を絶対許さず!」の合言葉の下に、武装した農行等共闘の「一糸乱れぬ反対の聲」に對応し、「死」の恐怖におけるく林動隊として、あじつぱい奴らは、気虚いじみた彈圧を始め

並上した公団職員、林動隊は、公団行動隊、婦人行動隊、老人行動隊、支援学生、片化者にみやめなく警棒を乱打し、髪の毛をむしり、けりおけ、不当使用し、更におなじと殺人の行為まで困束したのである。

奴等は、午後三時すぎ、駒井野田結二屋の高さ一十メートルの農民放送塔の一本の鉄柱の下部に「ライヤーロードを結びつけ、大型クレーンでひ、ぱつ、ぱつと放送塔を引き倒したのである。この為、農民放送塔は倒されたり折れの勢いで倒壊し、轟音を立てて吹上り、塔の上に立っていたわれわれの仲間一人は、地上に叩きつけられた。現場にて、反対同盟、農民は、

めう、「此々今までのあ前達のやじ口なんだ。話しあふ」といておいて、最後は力で握りつかず。ほにか民主主義国家だ」と。そして、この殺人の行為に三人が全身に大ヤードを負い、ひど死の尊辱。ハムが一千日以上の重傷。われわれは、一つした政府、公団、林動隊の、明らかに意図的の殺人行為を怒りを以て糾撃するとしても、「新東京国際空港」建設にかかる彼らの極めて反人民的野望をめぐらすことみてどうなればならない。政府、公団の愚鈍非道なやじ口によつて、駒井野、大浪、木ノ根田結二屋等は、一いつて彼らの手にわたった。

（8時11分）「おややく宅への準備を打ち」

破壊砲にも、その殺人の行為の血のりもかわぬ十八日、政府・公団は、取締部署の大木よしやんにせしめ、一千日以降、住宅、宅地を封鎖とされる代執行を行つた。こうといつて執行令状の宣告を行つた。政府・公団は、一人の年老いた貧しい農家の生きる権利すら剝奪せんとするのか、至極の無志にもてあつた。筆者

「おやあらへ」とせざる、十六日朝鮮における政府公団の殺人暴行をこなして、ハサニ一派が率いる隊列で番だらをむかへたんとした三里塚農学共斗に恐怖した彼らは、農業にも「不意打ちをされ」た。

「代執行は「十一日」と監獄的な発表を行なひ、実は、二十九日にて不意打ちをかね、村動隊の大同園と二かみ、脱穀作業をして二木大木より人の手足とかかえ、前輪を折り、田舎から出て代執行を強行したのである。」

「五〇に付して農業特別警備、アーネンガード襲撃の返り討ち三里塚共斗に登場、「おやあらへとせざる」が、三十名のトチ蔵に付して村動隊などぐるりとからんで、口の中に腰を押しつけ、一人をだんと道交法違反(?)に道路があるの正に「逮捕し、ハナ女加え、狂暴を犯す」と記述した。

「われに付しておばかは、ばかりやく空敷地で村動隊と対峙したことを同盟は、カヌーで武装し、石つぶてを、」

「いやうつ、ハナ女をかく」とばかり沿びせかけ、政府、

「三里塚の十一を、海づ、防衛し、」
『維持・拡大・發展』によつて。この日は、農民、労働者、学生の主とする三里塚共斗一次強制収用強制阻止の総戦で、がんばりはじめ、日本農民運動史上の、否、日本革命運動史上の、記念するべき戦いである。

たしかに、駒井野、天浪、木、根田結小屋、はあつや、

の住田、庄地なり、权力の手にわたつた。

だが、今回のコトにござり、日本人民は、現在でも、そ

の創意工夫、英雄的精神、武器、一の三つを正しく結びよ

せぬならば、國家の暴力殺戮、残酷な反革命的暴虐、一戦、一戦向では、出来ほんつて、やく滅ぼさんといへる事は確信をもつてた。

そして、この事を支えて、三里塚の農景は、國家权力の如何なる興奮にも屈しない三里塚農学共斗のオーナーの「根の深さ」であり、「根の松がり」である。三里塚農民は、子供や、婦人や、老人、達食、家族終るみで五百有余を計つてゐたが、ハナ女とは、日本階級斗争上、かくアキラめたのである。

又、三里塚農民は、6年秋采の全人民的政治斗争の大爆発の一環を「頂して」担つてゐた。革命的左翼の頭の下での、金田の露園、駒場、街頭の反乱は、三里塚農民の英雄的オーナー氣づけられ、又、逆に、三里塚農民のオーナー氣づけられたのである。

三里塚農民は、決して「書初」や「理論」一般大木「共産党」の反革命的本質を察見したのではない。それは、本來の共产党が、生産を賄つて生じて取組む

の死神の中で革命的左翼の下に結集する労働者、学生との親類は共斗を選択したのである。オーナー最重債務教師である。

全国の革命的労働者、学生のオーナー三里塚農民のオーナーは、数年間に渡つて、共に同し合ひ、オーナーと合つて成長して来たのであり、が、オーナーの全成果が、三里塚共斗次強制収用阻止斗争の輝かしい戦の眞の背景なのである。

三里塚農学共斗の团结の一つとして強し。アスコニアの一切のアフマド軍と粉井研セよ。

三里塚農民は、三里塚寺の本尊は、おひつだ、と曰

信と深め、その「オーナー」の「器」を、より難攻不落

の宝とて、お開けである。そして、阿蘭陀、農業の

ナシスバリのヒトナツて、出資額、隣人の壁を
越え、こなまくなく、確固たつている。

反対同盟や構築農民は、さつぱりと次のよつて語った。

「過去六年間の斗争で、構築隊が、われわれに何をして
きたか」との直接的な原因を考えるベキだ。構築隊は暴力
暴行に、良心のひとかけらもない非人道的行為を繰返し
ながら、仲間が死ぬと、殺され、殺されたときも隠してい
る。きょうの学生達の行動は決してわれわれ反対同盟の方
針からぬ上かつてのことはなく、われわれと一緒に行動
で戦ったものだ。「人命の尊さを知つては居るが、堅苦達
が通用しない。結構は元まで以上にやつぱり
三人、三人、四人の命とは終らひないだろう。敵側が横
暴な攻撃を發射し、彼らの戦は素すま激しいな
る焉」。

ところが、ガラスの戦争の組織が日本帝国主
義の侵略反革命に対してアローラーで除毛する
旗の下、世界へ食が肉戦をもつて反対する「血みどろの時
代」の臺灣の序幕を切つて落としていることに気がつく

者や農民はあんな「一はまうか」、「真向には口にする」
とか「まじめに眞面目に講じ」、「眞面目に開拓農業」
の团结に対する何が水を呑んでしているのだ。

「過激派」をさうぢううまと商字に思ひ込み、「三重環
農民の生活斗争を理解して、反対斗争をやうとしてい
る」と「過激派」非難をしていうモリになつてゐる
とある。

アローラー革命と、それに上つて東三省アローラー革命
社会は、全ての諸事象は「左主義」と「右翼」が「
形式」と「内容」が一致してゐるものである。

例えば、封建制を解体せしれん教と「無地有食」説
く農業の「自由」に關する御評論とは眞逆だが、それ
は、守備隊は皇の命仇の命を賣つて、自己の勞作力當
然ことが出来るところ農業の「自由」であり、そして、
その「自由」とは、勞作者が資本家に、自己の勞作力當
然の「自由」は、限り、その肉体を維持することができない
といふ「剥削の鉄鎖」に裏打ちされた「自由」なのである
。だが、アローラーの農業的オレ、共産主義的の

農業的オレは、二方とも貧困、ブルジョワ階級との對立
の二種農夫と自由あり、その公私分离の農田を經營す
る全

ガラスショワゾーは、凡てのストレッジョフ・マスコミを使つ
て、狂気のヤマ・反対「報道」攻撃をかけ、三重環農事と

「孤児」させ、その歴史全圖を隠すことを必死に阻
止せん」とこと。彼の真隠は、完全誤解をした小僧

は、農業、評論家のそれよりは、はるかに鋭く正確であ

る。彼は「ほの半」は「過激派學生」の「過激派」を

「学生が学生を碌々殺し」と「農学生」云々、と極限に

「農業」を想起するには至らない。今、一回の新聞、ラジオ、

学生が学生を碌々殺し」と「農学生」云々、と極限に

トキヤノペーン、アマ、反制「報道」による三里塚農場
其の切し崩し、三重塚寺の「弘花」の絶対的粉碎せ
る。三里塚農場其の結局、上に述べ。

人民の「怒り」と結合を開始した新た
たる武装斗争を大胆に發展させよ。
今秋三里塚「決戦」の勝利を突破
破口に、沖縄「協定」批准阻止
佐藤政府打倒へと進軍し、日
帝のアシナヤ侵略、反革命の最
初の挫折をうつせし。

16日の武装せる三里塚農場其の死斗を何取、資本家
階級はあくまで恐れ、マスコミを使って一大反撃や
ハペーンではあるが、日本の多くの農民は決起して
いなかではないか。ほとんどの田舎者は「田舎者」にひき
こられるのではないか。確かにそれは事実ではある。
だが、支配層は、何よりも武装せる三里塚農場の難題に
向ふる蜂起する日本農家の姿を直感している。

「農死村」を叫び、武器を取って五年有余も斗つてゐ

た三里塚農場の姿、因空の限界を超えて、日本人民の蜂起
を算出し、日本革命の運営は確信し、そのオーナーを組合し
と結託し、政府、官公一体とした反対同盟の切り崩し
に加し、16日のオーナーもつい連合せよ、と主張する
代名「共党」。

「農死村」しかまじ、「土地剥奪の小土地根性の
斗争だ。など、三里塚農場に黙識を投げつゝ無闇に争
しては、組合が持たぬ故、政治技術的に三里塚の世に「一
斗のない」で登場した、などと考え、的指して「革々
斗争」だ。など、「農死村」に黙識を投げつゝ無闇に争
しては、組合が持たぬ故、政治技術的に三里塚の世に「一
斗のない」で登場した、などと考え、的指して「革々
斗争」だ。

三里塚農場におけるこれら農家の反対的振舞は、
蜂起の時代における彼の振舞の縮小化で現在問題
である。

又、白の旗浦隊や滅戦は、既に指摘したように、我
らも株式をもつてゐることが可能があるといつて確信を
与えた。

日本農業の前途は、上記の如きの口レクション戦士
は必ずや、アーヴィングの「田舎者」の農場廃滅、現行の
戦を標榜し、田舎者を出しこそ農場廃滅へと進
じよう。

新日本農業の前途は、上記の如きの口レクション戦士
ヤーカシム。

ところが、6月27日、10時半頃の爆弾炸裂事件を由バ
トニモ、6月27日午後、田舎者、三里塚農場のうちの登
場してくるまつて、新たに政治的性格を呈し始めた。
6月27日午後6時半頃の爆弾炸裂事件を由バ
トニモ、6月27日午後、田舎者、三里塚農場のうちの登
場してくるまつて、新たに政治的性格を呈し始めた。

そのまことに、6月27日午後6時半頃の爆弾炸裂事件を由バ
トニモ、6月27日午後、田舎者、三里塚農場のうちの登
場してくるまつて、新たに政治的性格を呈し始めた。

北朝鮮
機関誌

北朝鮮
機関誌

我國は、蘇聯以降の多くの農業社會化の一環の農業社會化

☆北朝鮮農業新聞で取扱中☆

（二）開港場ニナカヨの底田果を踏み固め

中総領アガスティン・ルイ・アントワントの手にて
地図すゞく先進的労働者の手にて、

三里塚の進軍は、今秋即の、西、七〇年代の政治の勝利への条件を既に与えていた。

「一二三十九人民の「死を恐れぬ」三つの前進は、日本における本土一中國人民の日米反皇帝同盟の再編、強化、日本海による中國のアヒテ侵略前線基地化阻止の三つをはじめしつつ、あらためて之を、三ランシーアメリカ帝国主義のおもむく、「アミrians」とアヒテ人と呼わせる」という、「ランシーラン」、日本海の実施を共にして破壊に追いつめていた。

物価は底なしに上ひる一方、生産率は20人に1人の割合といえ、軍隊内叛乱の発生と反戦主義の激化、有色人種の叛乱を引き起し、対外的に「ランシーラン」が挫折を余儀なくされようとしているにつも、かくして「ランシーラン」義理へ反革命同盟とも体面をなすて、「訪中」の中国人の争いの争先をさらうとしている。しかし「ランシーラン」の状況は悲劇的である。ヤシと闘争の意図をもつた「訪中」

サイウム政権は、「訪中」が発表されたたゞで、内節不順を露呈させ、タエニ、カオ・キとタエニ、バン・チューの大統領選をめぐる悲劇は、ベトナム都市ヨロシタリアート人民の政治意識を急速に高め、チュー・サイウム政権の「最後の日」を日程にのほせている。

台湾・特代呂政権は、「訪中」発表によつてあつた「中国」を承し諸国のはじめのようは増加に、だすすべく、米帝批難と日帝への干渉入りを説明に狂狂してくる。

「韓国」朴正熙一派も、今有選舉法改正によって工競争に三層化したものの、対外的には「反共」国是として「競争」してくるを得なくなり、日帝の經濟進歩、資本投下による不適の集積に対する国内階級斗争の激化に、日帝の政治的、軍事的「介入」を要請せんとしていることとの深刻な矛盾を抱えこんでいる。佐藤政府の動搖、それに付する日帝の侵略、反革命への入り込みの困難が集中して、下訪中は既にうなづいた、「アミrians」の反革命的構造化の形勢が、既に現れてゐる。

（三）開港場ニナカヨの底田果を踏み固め

発表も、一たび「ランシの口から發せられるや

まじの一貫した米帝の侵略、反皇帝の歴史そのものを清算し、ルーナムならずべての米軍など方に撤退せ、ヤシ艦隊、「韓國」、中國、台灣の基地へ国縮強化を

やめさせ、「アミrians」から米帝とにちにさり、さりとばり叩き出すことを求めのる事となり、反皇帝同盟の根

幹をやすぶる行為をめ、このけた「義理」にうすに「ランシ」に、「アミrians」の反革命政権は立理由をゆすらうれどアヒアの反革命体制はなつかしくじてうとうとしている。ルーナム労働者機関誌「ニヤ・ボン」は、「ランシ」訪中決定の四日後、正しくしてのうに指摘した。

「ニランシ」采の状況は實際のもので悲劇的である。わがうなづけ通りつめられてしまふ全米、全世界が声を大にして叫んでゐる。ローナムでの侵略をやめて半米里を引きあげようとするよつては堅決の立場で「ランシ」は狂氣のふつた「だつて」出口をアヒアしていった。出口のところには開ひれていたが、又ねば然ハ、路の方へ、ろづりへしたのである。」

政府への責任転嫁の力、アヒア、手のり切りうるとしてころとく、60年代、社本協調路線の下、「六〇年代下りした佐藤は、丁寧に「人民の争いの前途」とされと音量にくた中国共产党、政府へ積極外交による「アヒア」、「朝一申」、「ニランシ」反米帝、反日帝統一戦線の成熟、體をめり、國を売つたつぞりの中國人民は、「アヒア復帰」をの國力達の開放はねちとめだい。アメ帝を中国へいたき出し、日本帝國主義の上から民族、国民党統治を打ち伏せ、日本帝國主義の侵略、反革命と対抗する「ローナム」、「五・一九」に競争、アヒア競争は終了し現在を十一日全島じそスーで迎え撃つんとこり。そこ本士は、とぶり返つて牛めじ、董大どもの支持を拡充し、マスクシットフル運動して「国民党」勢力を拡充したつとじでに、何たる「二二」重慶にて、「豪の子」の機動隊は、人民の「怒り」の

勝を倒せ」との声は豈に耳ちこる。

佐藤政府を倒せ。」アーヴィング、日本帝のアーヴィング侵略、反皇帝を訴す。

佐藤政府は水陸に追いつめられてゐる。佐藤政府を水の虫へ落とせ、そこへ水に落さださにだけ、敵を敵にたたきのめせ。

佐藤政府は、その仕事きて裏裏と裏裏とせし、連繩のアラヤ役官の連繩前綱墨地化といつて悲願とぞ思はせこそ退陣してせし。

アラヤのないアラヤ人民へ斗にし財底に本上に相輔人民の月が、今度、連繩と协定^{アラヤ}力阻止斗争の爆發で佐藤政府を倒せ。

連繩政は打倒を、マルヨフヨー内部の乗組せにしうどする自東洋ヲ反佐藤派や、或云因の努力第一に封じてあん。

とする「聯變」、アラヤ人民まみる革命の手に放置してはならぬ。我々はこの敵は部の暴虐による最大限利用しつつ佐藤政打倒にむろにけ人民の力を闘ひさせ、佐藤政府を倒せ。

その後報産と報私の中を退避させ、その中より混れじに潜りて

舟に跳城せば、人民の革命的暴力によて彼等を死んで畏怖へと埋りやれ。

子に子革命戦争に連署し、今秋ニ軍隊軍事の勝利を突破口に、連繩妥協定と取扱止、佐藤政府打倒へ連繩往々。

我々の主ひと存まさんとぞい。勾留の長期化とともにさすさすつり上げられぬ保鉄金は、起訴後次々遅延の報復であるとぞ予ておける。

全くの頭の調和、缺點調和、更にるかの頭道と長野に留者の健闘を以て、連大日本に身を守らんことをだらう語る。

登場してくる敵をさらに連續的に葬り、その過程で荒々しく自らの敵を口々に罵り見立めて登場してくる。

日本勞働者人民の巨万入游列を、武昌蜂起、労働者権力樹立の一束へ因けて取引するなどは我々の当面の仕事してはいけばならぬ。

三重連合軍の勝利に、大切に聞けり、連繩、始定と謀定、行阻當道へと養つてある今秋頭道には

間違ひなく、日本に威脅における将来の因襲の防戒への警戒強化を反るに相違ない。

我々は、今世期の烈火の革命ヨリ來る中で過去の新左翼運動の本意的、左翼反対派的政策をされに、

ぱり一掃し、日本共産主義運動の頭の本ルニエスイモ派への飛躍の系団を必らず把促しなければならない。

全ての生産的労働者、学生、市民諸君の三重隊機動隊殲滅戦に対する支配者の眞懸念色慄風を、自らの思想と行動によつて、現実のものとせしも

日本帝国主義の凶暴反黒帝方轉移、機動隊と組合

卷之三

卷之三

一
二
三
四
五
六
七
八
九